

「道徳主義をこえて」(3)

菊田佳行

「御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。御言葉を聞くだけで行わない者がいれば、その人は生まれつきの顔を鏡に映して眺める人に似ています。鏡に映った自分の姿を眺めても、立ち去ると、それがどのようなようであったか、すぐに忘れてしまいます。しかし、自由をもたらす完全な律法を一心に見つめ、これを守る人は、聞いて忘れてしまう人ではなく、行う人です。このような人は、その行いによって幸せになります。」 (ヤコブの手紙1章22-25節)

前回までの2回にわたり、「道徳主義をこえて」という題で、日本のキリスト教の現状について思うところを話させて頂きました。そこでは、明治以来の日本のキリスト教は、本来の聖書が証しするイエス・キリストの姿より、その反対者であったファリサイ派と呼ばれる人々の厳格な道徳主義的な姿勢の方を継承してしまったのではないかということ述べさせて頂きました (NO.618,619を参照してください)。今回は前回の続きで、ここに挙げている聖書箇所における「行い」の意味するところについて述べさせて頂くことで、道徳主義的な「行い」ではない、キリスト教本来の実践の意味を明示したいと思います。

このヤコブの手紙の箇所では、御言葉を聞くだけでなく、行うように読者に要求しています。しかしその要求は、御言葉を聞くだけで行わないのであれば、厳しい天罰が下るのだというようなことは一切言われていないということが、まず大切です。この箇所だけではなく、とかく聖書の「行い」を要求する言葉を必要以上に重く受け取り、その要求を行うか行わないかで、即座に神からの断罪を連想するといった聖書の読み方は、本来的なイエス・キリストの良き知らせとは、別のものだと考えるべきです。ここで言われているのは、その様な罪への断罪を突きつけるというのではなく、御言葉を行うのは、**忘れないようにするためだ**ということです。聞くだけで行わない人は、自分の顔を鏡で見ている、立ち去るとすぐに忘れてしまう人のようで、忘れないようにするためには、御言葉を実際に実行して、その言葉を**身体に覚えさせることが必要なのだ**ということです。つまり、このヤコブの手紙も、絶対的な神の恵みである赦しというものがまず先にあるのであって、その神からの変わる事のない「あなた方をわたしは赦す」という神の宣言を、どのような状況に置かれることになっても、私たちが忘れないでいられるようにするために、御言葉を「行う」のだということです。

神からのイエス・キリストを通して与えられた赦しの宣言は、確かにありがたく、特に人生の中で大きな過ちを犯してしまい、誰からも嫌われ、孤独の中を一人さまようといったような状況においては、大変救いをもたらしてくれる嬉しい知らせになることであるでしょう。その様な一人寂しい状況においても、世界のすべてを治められている神だけは、自分のことを赦してくれていて、見捨てられてはいないということは、結局、誰にとっても最終的な救いの言葉になるのではないかと思います。それは、どのように祝福された人

生を送っている人であっても、やはり一人で死というものを、通過して行かなくてはならないということがあるからです。そこでは最終的には、誰の助けもないところで、生死を司る神に、誰もが向き合わなくてはならなくなるでしょう。その時に頼りになるのが、「あなた方をわたしは赦す」と断言された、神からの赦しの約束です。この言葉を、臨終の間際まで覚えていられたら、それはさぞかし心強いことだと思われます。たとえその時が、どのようなひどい最後だったのだとしても、神の赦しの言葉に包まれていたのなら、そこでの恐れへの思いは、大分軽減されることなのでしょう。また、そこまで行かなくても、わたしたちの人生の中には、喜びの出来事とだけでなく、多くの悲しい出来事が訪れます。大切な人との別れなども、その中の大きな一つです。その様な時にも、神の赦しの約束が、その人にも及んでいるということ、悲しみの現実の中でも、どこかで覚えていることが出来たのなら、これもまた、何ものにも変えることの出来ない大きな慰めを、私たちに与えてくれるのだと思います。

しかし、人間は、大変忘れやすい生き物です。何回か言葉で聞いたのだとしても、すぐに忘れてしまいます。そして、特に、一番苦しい時になると、そのことは顕著なこととなり、平静な時は覚えていられたことも、すっかりどこかに飛んで行ってしまいます。それでは、せつかくの神からの赦しの宣言も、私たちの苦難には、何の役にも立たないということになりかねません。ですから、日頃からいかに自分の身体で神の赦しの現実を身に染みいらせて行くかが、大切な作業となるわけです。洗礼を受けるとか、信仰者になるということ、あるいはそこまで行かなくても、この方向で生きて行こうと姿勢を向けるということは、言ってみれば、その作業をして行くスタートラインに着くということが出来るのだと思います。どのようなことが自分の人生に起こったとしても、神の赦しだけは、自分の周りから取り去られることはないという、確かな人生の土台を築くことに、着手することだということです。どれだけ神からの赦しを、自分のものとして受け取って行けるかで、人生の安心感や、自由さが決まってくるのだというわけです。

ここでの聖書箇所での御言葉とは、他者に対してなるべく怒らないようにし（1章19-20節）、その相手を自分のことのように愛しなさい（2章8節）というものであります。このことは、イエス・キリストが、「あなた方の父（神）が憐れみ深いように、あなたがたも（他者には）憐れみ深い者となりなさい」（ルカによる福音書6章36節）という御言葉によって、要約されています。この他者への憐れみの実践こそが、御言葉の実践の中身であり、中心的な事柄であります。言ってみれば、神が憐れみ深い方であるが故に、私たちがその憐れみを出来る限り実践して行こうとする時に、神の憐れみの姿が、本当に意味で見えてくるということです。これは、知識や情報だけではどうにもならないことです。辞典で神の憐れみについていくら調べてみても、決して知ることが出来ない体験的な事柄に属するものです。やはり、自分自身の身体全体で、実際に御言葉を「行動」すること、知ることの出来ない領域なのです。他者へのゆるしを「行う」こと、神からの赦しの深いところを知ることはないのだということです。そしてこの体験的に神からの赦しを知ることが、このイエス・キリストからの御言葉に含まれた、一つの重要な目標であるのだということです。イエス・キリストは、多くの場合、私たちに対して要求し、時には警告までされています。これらはすべて、私たちが、神と出会い、神を知り、神の赦し

と憐れみを、どのような状況でも覚えていただけるようにと、私たちの幸せを願って発せられた御言葉なのです（1章25節）。

これまで、3回に渡り、日本のキリスト教における厳格な道德主義的な傾向の誤りを述べると共に、キリスト教での「行い」の本来の意味を、私なりに述べさせて頂きました。キリスト教での「行い」の本来の意味を取り戻し、良き知らせとしての実践の要求を、日本のキリスト教は、人々に提示して行かなくてはならないのだと、私は考えています。クリスマスを迎える今、そのことが少しでも進んで行くように願っています。